

アズハル機構の近代的再編(文献解題)

著者	池内 恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	35
ページ	111-117
発行年	2003-07
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005795

アズハル機構の近代的再編

池 内 恵

はじめに

アズハル機構の再編過程は、エジプトの近代国家形成過程において重要な位置を占める。それは政教関係の再編成の最大の課題となり、国家権力と宗教指導者層のせめぎ合いの場となった。

アズハル機構はスンナ派イスラーム教の宗教教育機関の筆頭に位置するアズハル大学を擁するが、それが担う役割は宗教教育の領域にとどまるものではない。ワクフ省とともに宗教行政機構の中枢という意味を持つ。アズハル機構の再編は宗教領域の再編成であるにとどまらず、近代法体系・法廷制度の成立や、公教育制度の整備といった、近代国家形成過程全体と密接に関係してくる。また、それはエジプトの近代官僚制の成立過程の重要な一角をなす。政治支配者への従属性を通常の状態としながらも一定の自律性を確保してきた宗教指導層と宗教機構が、近代の国家官僚制へ組み込まれて行く過程でもある。

前近代においてアズハル機構に拠るウラマーは、家族法を中心とした限定的領域においては法的解釈の権威であり、宗教教育とアラビア語教育を担う教育者・知識人階層としての社会的機能を果たしてきた。その地位は近

代法制と近代教育制度、近代国家官僚制の成立の過程で変化を迫られたが、エジプトにおいて近代化は必ずしも宗教領域の周辺化を意味しなかった。むしろ宗教の政治・社会的位置づけが再確認され、ウラマーの新たな役割が確保され、制度化されていったと見た方がよいだろう。アズハル機構の近代的再編とは、宗教の近代世界における役割の、エジプト独自の発現形態を意味する（それがアラブ世界やイスラーム世界の諸国といかなる共有項と相違を持つのかを研究するのは将来の課題となるだろう）。

アズハル機構の再編は、エジプト近代国家の中央集権化の過程とも軌を一にしている。前近代に成立していた、各地のモスクや学院（マドラサ）からなる分散的・多元的な宗教教育・行政の組織は、アズハル機構を中央機関としヒエラルヒー的な頂点とする、集権的組織体系に統合されていった。

本稿ではアズハル機構の近代における再編過程に関する文献を、アラビア語のものを中心にまとめた。これらの資料と先行研究を踏まえることで、近代エジプトの政教関係の変容を総合的に論じていくことが可能になるだろう。

1. 近代国民国家形成とアズハル機構

まず通史的文献を挙げておく。アズハル機構の前身となるアズハル・モスクはファティマ朝4代カリフのムイッズディーン・アッラーの命により970年に着工され、972年に完成したとされる。そのため1950年代から「アズハル1000年」を期した通史的著作が刊行されている。アズハル機構の側からの公式的歴史叙述が *Wizāra al-Awqāf wa Shu'ūn al-Azhar* [1964] として出されているが、*Khafāji* [1954/1955] や *Qarā'a* [1968]、*Shanāwī* [1983]、*Muḥammad* [1986] といった大部で多面的な著作からより多くの情報を得ることができる。欧米語では *Dodge* [1974] の通史が代表的である。

近代的再編の前提となる前近代におけるアズハル機構とそこに拠るウラマーの社会的役割に関する研究としては *Marsot* [1972]、*Sa'dani* [1994] を参照する必要がある。

近代的再編過程の諸プログラムに関して、*Ṣayyādī* [1992] が概観を提示する。同時代において資料をまとめた *Al-Jāmi' al-Azhar* [1905]、*Ṣa'īdī* [1943] には資料的価値がある。

アズハル機構の近代的再編が一応の完成を見たナセル時代には、アズハル改革に関する欧米語の研究が複数現れた (*Sfeir* [1956]、*Safran* [1958a] [1958b]、*Crecelius* [1966])。Bin Salamon [1980] は未公開の博士論文だが、再編過程を網羅して整理している。*Warburg* [1982] はアズハル機構再編を政教関係全般の変動の中に位置づける。小杉 [1987] が提供する、近代的再編後の組織図は有用である。

アズハル機構の再編をエジプト社会全体の構造変動の中に社会的に位置づけたのが *Eccel* [1984] であり、その過程の社会史的叙述として *Dasūqī* [ca. 1980] がある。また *Aroian* [1983] は、前近代において宗教教育と共にアラビア語教育を担ってきたアズハル機構が、近代的教育制度の形成過程で被った位置付けと役割の変化を取り上げている。

このような機構的再編の政治的背景は、*Ali* [1974] [1986] に詳しい。また、時代における再編の完成期においてアズハル機構の有力ウラマーが果たした政治的役割は *Rabī'u* [1992] によって論じられている。

2. 宗教回帰・宗教の政治化とアズハル機構

近年にアズハル機構の研究は新たな段階を迎えている。1970年代以降に顕在化した、宗教信仰への回帰の現象や、そこから活力を汲み取る宗教政治運動の伸張がみられただけでなく、国家の側からも宗教シンボルを統治の手段として活用するといった事態が生じ、宗教の政治化が進んだ。それによってエジプト近代国家のあり方とその中で宗教の位置づけを、エジプト政治社会研究の焦点として問い直す機運が醸成されたといえよう。アズハル機構の位置づけはムスリム同胞団を中心とするイスラーム主義運動と並んで重要な研究対象となっている。

1990年代末に英文の代表的な研究誌に相次いで発表されたのが *Barraclough* [1998]、*Zeghal* [1999] であり、後者は浩瀚な *Zeghal* [1996] を踏まえている。アズハル機構のウラマーだけでなく、ムスリム同胞団のような

平信徒を中心とした宗教政治運動の役割も含めた現代エジプトの政教関係の変動については Moustafa [2000] が論じている。

政治的統合の一翼を担うことでアズハル機構は近代国家機構に安定的な地位を確保した。それはいわば国家のイデオロギー装置としてのアズハルの再編だろう。アズハル機構の高位のウラマーは、体制のイデオログとして、政策判断に宗教的理論化・倫理的裏打ちを与えることが課されている。Skovgaard-Petersen [1997] によるファトワー庁の成立過程とその政治的役割の研究は、この対象に関する包括的・網羅的な成果である。

アズハル機構の高位ウラマーのイデオログとしての役割の実例として、例えば利子問題をめぐって近代的な銀行・貯蓄制度をイスラーム教の観点からも容認しようと論じた現アズハル機構総長のムハンマド・サイイド・タンターウィーによる法判断・解説書が、大統領夫人であるスーザン・ムバーラク女史肝いりの出版助成キャンペーン「家族文庫」の一環として廉価版で出版され、流布していることを挙げることができよう (Ṭanṭāwī [1998])。タンターウィーは利子容認の根拠をマフムード・シャルトゥート (1958~63年にアズハル機構総長を務めた) の判断に溯ってそれを再確認している。一方シャルトゥートはムハンマド・アブドゥ (1899~1905年に大ムフティーを務めた) の利子容認の判断を継承している。ここから、このような立場がアズハル機構の高位ウラマーの基本姿勢であることが示されよう。

このような明白な政権のイデオログとしての役割だけでなく、社会階層としてのウラマーとその働きが、より一般的に政治社会の

統合に果たす役割の重要性も、近年の研究で再確認される傾向にある。エジプトの政治的統合にウラマーが果たす役割は Borthwick [1967] で指摘されていたが、近代的再編によって成立した新たな役割や位置づけ、およびその現代的変容の研究として Eccel [1988] がある。Starrett [1998] は近代教育制度の中での宗教教育の意味を論じることによってアズハル機構の役割も浮かび上がらせている。Gaffney [1991] [1994] によるモスク説教師職 (ハティーブ職) に着目した研究は、アズハル機構の末端組織と人員による地方への浸透のあり方を、臨場感に満ちた筆致で描いている。

アズハル機構はエジプトの国際政治戦略の一手段という意味も持ち始めている。再編によって、アズハル機構は近代的な官僚機構となり、その高等教育部門はエジプト国民国家の教育機関の一部としてのアズハル大学となった。しかしスンナ派イスラーム世界全域での高等宗教教育の機関としての役割も果たし続けている。特に重要なのは、東南アジアとの関係であり、Abaza [1994] はその実態を社会調査によって明らかにしようとする。

3. アズハル機構への批判

このように体制に順応し、国家官僚制の一翼を担うアズハル機構の姿勢には批判も根強い。思想・文化統制の機関としてのアズハル機構の地位の高まりに対しては、Maṣṣūr [1994], Bora'ī et al. [1994] のように人権擁護団体から警鐘が鳴らされる。一方、アズハル機構がむしろ宗教規範の社会的徹底を推進・強化することを求め、政治権力への対抗姿勢

を強めることを要求するムスリム同胞団の立場からは、権力への従属的姿勢が批判されることになる(Shalabi [1998])。そこから、Ismā'il [1996]に見られるように、前近代においてアズハル機構とウラマーが果たしてきた政治的役割を振り返り、翻って現代のアズハル機構とウラマーの自律性の喪失と権力への従属性を批判する議論が出てくる。アズハル大学出身で、ムスリム同胞団のイデオロギック的役割を担う人気ウラマーであるユースフ・カラダーウィーによる内省が Qaraḍāwī [1984] である。

4. アズハル機構の横顔：著名ウラマー伝

制度的再編過程の理解は、それを担った人物の理解を加えることで立体的なものになる。そのためにはアズハル機構総長や著名ウラマーの列伝類が参考になる。アズハル機構の側から出された公定的な列伝として例えば Khaṭṭāb [n.d.] がある。1929年から1935年にアズハル機構総長を務めたムハンマド・アフマディー・ザワーヒリーについて、その子息ファフルッディーン・ザワーヒリーが綴ったのが Ṣawāḥiri [1945] である(ザワーヒリー総長の別の子息で著名な外科医であるムハンマド・ザワーヒリーの子が、ジハード団の有力メンバーであり、ウサーマ・ビン・ラーディンを総帥とするアル=カーイダ組織のナンバー2として勇名を馳せることになったアイマン・ザワーヒリーである)。

このような主流派ウラマーの回想と、アズハル教育を受けながら政治的には袂を分かって反体制運動に身を投じたウラマーの回想では、当然趣が異なる。代表的なものとしては、

イスラーム集団の精神的支柱となったウマル・アブドッラフマーンの回想録がある('Abd al-Raḥmān [n.d.])。

より穏健で広い大衆的支持基盤を持つムスリム同胞団の思想的支柱となった前出のカラダーウィーは、自伝でアズハル機構傘下の地方の初等教育機関を経て、カイロでアズハル大学に学ぶに至る諸段階の経験を詳細に記し、その過程でムスリム同胞団に接近する経緯を回想している(Qaraḍāwī [2002])。また、ムスリム同胞団の立場から、アズハル機構の著名ウラマーのうち活発な政治活動を行い、西洋の思想的・政治的侵入に対して強硬姿勢を鮮明にした人物を特に取り上げ賞揚した Ṭahṭāwī [ca. 1990] も興味深い。

アズハル機構で教育を受けた人々の影響は宗教界に限らない。エジプトの近代文学・学芸への貢献も大きい。これについては Fiḡi [1982-1986] が網羅的にまとめている。

思想史研究においても、エジプトのウラマーの思想をアズハル機構再編の過程においてみることで、新たな視点が生れるだろう。エジプトの近代思想史研究は、多くの部分はムハンマド・アブドゥの研究に費やされてきたといってもいい(代表例は Adams [1933], Kedourie [1966], Kerr [1966], Badawi [1976] など)。これらの研究では前三者がアブドゥを「近代改革」の過程に位置づけるのに対し、Badawi は「イスラーム主義運動」の文脈で位置づけるという違いはあるが、いずれも「偉人」アブドゥの思想がいかにエジプトおよびアラブ世界の宗教思想の流れを決定づけたかを跡づけようとする。しかしこのような前提と方法によってアブドゥの宗教史的・政治史的意義をどれほど反映できてきたか、定

かではない。アブドゥの功績の少なからぬ部分は、思想家というよりも有能な行政官として、改革プログラムを提唱し実現に奔走した政策立案・実行者としてのものであり、「宗教行政官としてのアブドゥ」を読み直して見る必要があるだろう。アブドゥの行政官としての側面の重要性に注意を促した松本[1988]の論稿は発展的に継承されるべきだろう。アブドゥは1888年に亡命からの帰国を許されるまでに、近代教育制度の中で宗教教育を重視し、組み込むことが政治権力者にとって（宗教者にとっても）有益であると忠告した提案書「エジプトの教育制度に関する所見」を完成させていた。対西洋・対キリスト教の護教論的色彩の濃い神学論がアブドゥの「主著」とされがちであるが、体制側のウラマーとしてのアブドゥ後半生において最もその本領を発揮し、指導的ウラマーとしての地位を確かなものにしたのは、むしろ一連の宗教制度改革の提言だろう。「啓治法廷改革報告」（1899年）、「アズハル教育改革の目的」「諸モスク再編成計画」（共に1904年）といったものが、アブドゥ全集（新版）に収められている（‘Abdu[1993]）。

むすびに

アズハル機構再編をめぐる文献は以上に挙げた限りで尽きるものではないが、その広がり多面性を幾分かは伝えられただろうか。この再編過程は、エジプト近代国家形成過程全体の中に位置づけることでその近代史的意義が理解されるだろう。法制史、教育制度史など多岐にわたる関連分野の研究蓄積を包括的に挙げる紙幅はないが、例えば Sālim [1982]

のような近代法制史研究の成果にもとづいて、アズハル機構再編過程で生じたイスラーム法廷やウラマーの地位の相対的变化を跡づけてみる必要がある。‘Abd al-Karīm [1938], Abū al-As‘ād [1983], Huraydi [1989] といった豊富な先行研究に恵まれている教育制度史の文脈に、アズハル傘下の諸機関の変遷を重ね合わせてみることも有益だろう。アズハル機構の研究を通じて、エジプト近代政治史の多彩な諸側面を浮き彫りにすることができるだろう。

【文献リスト】

- Abaza, Mona [1994] *Indonesian Students in Cairo: Islamic Education, Perceptions and Exchanges*, Paris, Association Archipel.
- ‘Abd al-Karīm, Aḥmad ‘Izzat [1938] *Tārīkh al-Ta‘līm fī ‘Aṣr Muḥammad ‘Alī*, Cairo, Maktaba al-Nahḍa al-Miṣrīya.
- ‘Abd al-Raḥmān, ‘Umar [n.d.] *Kalima Ḥaqq: Murāfa‘a al-Duktūr ‘Umar ‘Abd al-Raḥmān fī Qaḍīya al-Jihād*, Cairo, Dār al-‘Itishām.
- ‘Abdu, Muḥammad [1993] *Al-A‘māl al-Kāmila li Imām al-Shaykh Muḥammad ‘Abdu*, Cairo, Dār al-Shurūq.
- Abū al-As‘ād, Muḥammad [1983] *Siyāsa al-Ta‘līm fī Miṣr taḥta al-Iḥtilāl al-Burjūānī 1882–1922*, Cairo, Dār al-Nahḍa al-‘Arabīya.
- Adams, Charles C. [1933] *Islam and Modernism in Egypt*, London, Oxford University Press.
- Al-Jāmi‘ al-Azhar [1905] *A‘māl Majlis Idāra al-Azhar: Min Ibtidā’ Ta’ sīs-hu Sana 1312 ilā Ghāya Sana 1322*, Cairo, n.p.
- Alī, Sa‘īd Ismā‘īl [1974] *Al-Azhar ‘alā Masrah al-Siyāsa al-Miṣrīya*, Cairo, Dār al-Thaqāfa.
- Alī, Sa‘īd Ismā‘īl [1986] *Dawr al-Azhar fī al-Siyāsa al-Miṣrīya*, Cairo, Dār al-Hilāl.
- Aroian, Lois A. [1983] *The Nationalization of Arabic and Islamic Education in Egypt: Dar-al-‘Ulum and Al-*

- Azhar, Cairo, The American University in Cairo Press.
- Badawi, Zaki[1976]*The Reformers of Egypt*, London, Croom Helm.
- Barraclough, Steven[1998]“al-Azhar: Between the Government and the Islamists,” *The Middle East Journal* 52, pp. 236–249.
- Bin Salamon, Ahmad W.[1980]*Reform of Al-Azhar in the 20th Century*, Ph. D. Dissertation, New York University.
- Bora'i, Najād Al- et al.[1994]*Ḥurriya al-Ra'y wa al-Aqida Quyūd wa Ishkālīya al-Juz' al-Thānī Riqāba al-Azhar 'lā al-Muṣannafāt al-Sam'iya wa al-Sam'iya al-Baṣariya*, Cairo, al-Munazzama al-Miṣriya li-Ḥuqūq al-Insān.
- Borthwick, Bruce M.[1967]“The Islamic Sermon as a Channel of Political Communication,” *The Middle East Journal* 21, pp. 299–313.
- Crecelius, Daniel[1966]“Al-Azhar in the Revolution,” *The Middle East Journal* 20, pp. 31–49.
- Dasūqī, 'Aṣīm Al-[ca. 1980]*Mujtama' 'Ulamā' al-Azhar fī Miṣr 1895–1961*, Cairo, Dār al-Thaqāfa al-Jadida.
- Dodge, Bayard[1974]*Al-Azhar: A Millennium of Muslim Learning*, Washington, D.C., The Middle East Institute.
- Eccel, A. Chris[1984]*Egypt, Islam and Social Change: Al-Azhar in Conflict and Accommodation*, Berlin, K. Schwarz.
- [1988]“Ālim and Mujāhid in Egypt: Orthodoxy Versus Subculture, or Division of Labor?,” *The Muslim World* 78, pp. 189–208.
- Fiqī, Muḥammad Kāmil Al-[1982–86]*Al-Azhar wa Athar-hu fī al-Nahda al-'Arabīya al-Ḥadītha*, 3 vols., Cairo, Maktaba Nahda Miṣr.
- Gaffney, Patrick D.[1991]“The Changing Voices of Islam: The Emergence of Professional Preachers in Contemporary Egypt,” *The Muslim World* 81, pp. 27–47.
- [1994]*The Prophet's Pulpit: Islamic Preaching in Contemporary Egypt*, Berkeley, University of California Press.
- Ismā'il, 'Abd al-Jawwād Ṣābir [1996]*Dawr al-Azhar al-Siyāsī fī Miṣr Ibbāna al-Ḥukm al-'Uthmānī*, Cairo Maktaba Wahba.
- Huraydī, Ṣalāḥ Aḥmad[1989]*Al-Ta'līm fī Miṣr fī al-Qarn al-Thāmin 'Aṣhar*, Alexandria, Dār al-Ma'rifa al-Jāmi'iya.
- Kedourie, Elie[1966]*Afghani and 'Abduh: an Essay on Religious Unbelief and Political Activism in Modern Islam*, New York, Humanities Press.
- Kerr, Malcolm[1966]*Islamic Reform: The Political and Legal Theories of Muḥammad 'Abduh and Rashid Rida*, Berkeley, University of California Press.
- Khafāji, Muḥammad 'Abd al-Mun'im[1954/1955]*Al-Azhar fī Alf 'Ām*, 3 Vols, Cairo, Maṭba'a al-Muniriya bi al-Azhar.
- Khaṭṭāb, 'Abd al-Mu'izz[n.d.]*Shuyūkh al-Azhar*, Cairo, n.p.
- 小杉泰 [1987]「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立 エジプトに見る『伝統』と『革新的回帰』」(片倉もとこ編『人々のイスラーム その学際的研究』日本放送出版協会)
- Manṣūr, Aḥmad Ṣubḥiet al.[1994]*Ḥurriya al-Ra'y wa al-Aqida: Quyūd wa Ishkālīya*, Cairo, al-Munazzama al-Miṣriya li-Ḥuqūq al-Insān.
- Marsot, Afaf Lutfi Al-Sayyid[1972]“The Ulama of Cairo in the Eighteenth and Nineteenth Centuries,” in Niikki R. Keddie(ed.) *Scholars Saints and Sufis: Muslim Religious Institutions in the Middle East since 1500*, Berkeley, University of California Press.
- 松本弘 [1988]「ムハンマド・アブドゥフのイスラーム改革 その思想と制度的・法的改革運動」(『日本中東学会年報』第3巻第2号)
- Moustafa, Tamir[2000]“Conflict and Cooperation between the State and Religious Institutions in Contemporary Egypt,” *International Journal of Middle East Studies* 32, pp. 3–22.
- Muḥammad, Muḥammad Kamāl al-Sayyid[1986]*Al-Azhar Jāmi'an wa Jāmi'atan: Aw Miṣr fī alf 'Āmm*, Cairo, Al-Hay'a al-'Āmma li-Shu'ūn al-Maṭābi' al-Amīriya.
- Qarā'a, Sanīya[1968]*Tārīkh al-Azhar fī Alf 'Āmm*, Cairo, Maktab al-Ṣaḥāfa al-Ḍawli.
- Qaraḍāwī, Yūsuf al-[1984]*Risāla al-Azhar bayna al-*

- Amsi wa al-Yawm wa al-Ghad: bi-Munāsaba al-Ihtifāl bi-‘Īd-hi al-Alfī*, Cairo, Maktaba Wahhba.
- Qaraḍāwī, Yūsuf al-[2002]*Ibn al-Qarya wa al-Kuttāb: Malāmiḥ Sira wa Masīra*, Cairo, Dār al-Shrūq.
- Rabī’u, Mājida ‘Alī Ṣāliḥ [1992]*Al-Dawr al-Siyāsī li-Al-Azhar 1952–1981*, Cairo, Markaz al-Buḥūth wa al-Dirāsāt al-Siyāsiya.
- Sa’danī, Abū-Warada ‘Abd al-Wahhāb ‘Aṭīya Al-[1994]*al-Jāmi‘a al-Azhar wa Shuyūkh-hu fī al-‘Aṣr al-Uthmānī (Min Sana 923 ilā Sana 1213h)*, Cairo, Maṭba‘a al-Amāna.
- Safran, Nadav[1958a]“The Abolition of the Shar‘i Courts in Egypt. I,” *The Muslim World* 48, pp. 20–28.
- Safran, Nadav[1958b]“The Abolition of the Shar‘i Courts in Egypt. II,” *The Muslim World* 48, pp. 125–135.
- Ṣa‘īdī, ‘Abd al-Mut‘āl Al-[1943]*Tārīkh al-Iṣlāḥ fī al-Azhar: Wa Ṣaḥāfāt min al-Jihād fī al-Iṣlāḥ*, Cairo, Maṭba‘a al-I‘timād Miṣrī .
- Sālim, Laṭīfa Muḥammad[1982]*Al-Niẓām al-Qaḍā‘ī al-Miṣrī al-Ḥadīth 1875–1914*, Cairo, Markaz al-Dirāsāt al-Siyāsiya wa al-Istirātijīya bi al-Ahrām.
- Ṣayyādī, Mukhlīṣ Al-[1992]*Al-Azhar wa Mashārī‘ Taṭwīr-hu 1289–1390 H., 1872–1970 M.*, Beirut, Dār al-Rāshid.
- Sfeir, George N.[1956]“Abolition of Confessional Jurisdiction in Egypt: The Non-Muslim Courts,” *The Middle East Journal* 10, pp. 248–256.
- Shalabī, ‘Abd al-Wudūd[1998]*Al-Azhar ilā Ayna?!*: *Min Shaykh Azharī ilā Shaykh al-Azhar*, Cairo, Dār al-I‘tiṣām.
- Shanāwī, ‘Abd al-‘Aziz Muḥammad Al-[1983]*Al-Azhar Jāmi‘an wa Jāmi‘atan*, 2 Vols., Cairo, Maktaba al-Anjilū al-Miṣrīya.
- Skovgaard-Petersen, Jakob[1997]*Defining Islam for the Egyptian State: Muftis and Fatwas of the Dār al-Iftā*, Leiden, Brill.
- Starrett, Gregory[1998]*Putting Islam to Work*, Berkeley, University of California Press.
- Ṭaḥṭāwī, Muḥammad ‘Izzat Al-[ca. 1990]*Min al-‘Ulamā’ al-Ruwwād fī Riḥāb al-Azhar*, Cairo, Maktaba Wahba.
- Ṭanṭāwī, Muḥammad Sayyid[1998]*Mu‘āmalāt al-Bunūk wa Aḥkām-hā al-Shar‘īya*, Cairo, Nahḍa Miṣr.
- Wizāra al-Awqāf wa Shu‘un al-Azhar[1964]*Al-Azhar: Tārīkh-hu wa Taṭawwur-hu*, Cairo, Wizāra al-Awqāf wa Shu‘un al-Azhar.
- Warburg, Gabriel R.[1982]“Islam and Politics in Egypt: 1952–80,” *Middle Eastern Studies* 18, pp. 131–157.
- Zawāhirī, Fakhr al-Din al-Aḥmadī al-[1945]*Al-Siyāsa wa al-Azhar: Min Mudhakkirāt Shaykh al-Islām al-Zawāhirī*, Cairo, n.p.
- Zeghal, Malika[1996]*Gardiens de l’islam: les oulémas d’Al Azhar dans l’Égypte contemporaine*, Paris, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques.
- Zeghal, Malika[1999]“Religion and Politics in Egypt: The Ulema of al-Azhar, Radical Islam and the State(1952–94)” *International Journal of Middle East Studies* 31, pp. 371–399.